

事業の背景・目的

国内希少野生動植物種ヤツガタケキンポウゲは、本州中部山岳の八ヶ岳の固有種であるが、自生地が極めて限定的で個体数も少なく、集団の存続が危惧される状態にある。その存続危険性の主要因としては、こうした産地極限に加えて、近年ニホンジカの食害影響が顕著となっている。そのため、本事業では、ヤツガタケキンポウゲ野生個体群の消失を緊急措置的に防ぐとともに、今後の保護増殖に向けて本種の分布情報・生態学的特性など基礎情報を収集する。



事業の内容

防鹿柵設置事業

前年度の生育現況調査で、本種の地上部の群落内や周辺では、ニホンジカによる採食痕跡や多数のシカの糞、踏跡が確認され、ニホンジカ採食による地上部の群落の存続危険性が極めて高いことが確認された。

そこで、ニホンジカ食害が懸念される地上部の集団を対象に、防鹿柵を設置した。

防鹿柵は、本種の自生地が急斜面上であることから、大規模柵や継続的な管理を要する電気柵ではなく、登山道で運搬しやすい軽量の資材による簡易・小規模な防鹿柵とした。

その資材の可搬性・耐久性、保護効果を確認することができた。



設置した防鹿柵



設置した防鹿柵
(アクションカメラで直下撮影)

得られた成果

分布状況等調査で確認された残存集団のうち、ニホンジカ食害が懸念される地上部の集団は、約10m×5m程度の範囲に限定的に生育していた。

この範囲のなかで、特に開花個体が集中する区画（約3m×3m）について、グラフィポールと獣害防止ネットで囲み、防鹿柵とした。柵高は、本種の生育に支障のない約1mとした。柵内には、本種の開花個体10個体（未開花個体は多数確認）が生育し、その後、柵設置後の採食は見られず、結実が確認された。

左：実生個体（白矢印） 右：生育地周辺のシカ採食状況

